

畠山重忠・重保伝承の生成

—内閣文庫本『畠山六郎志げ体』から読み解く—

若松良一

はじめに

畠山重忠は郷土が生んだ英雄である。残念なのは畠山家が断絶したため、家文書が一切残っていないことである。しかし、後世の二次資料はきわめて豊富である。試みに埼玉県立文書館の所蔵を検索してみると、三十六件がヒットする。近年の刊行物を除外した上で、左に一覧表を掲げる。その内訳は、伝記、芝居絵、重忠の顕彰事業に関するものなどに亘っている。これらの内、最も古いのは一〇番

番号	家	資料番号	資料名
一	持田(文)	九八	井原五所神社永代奉額(集句)
二	同	一三七	畠山重忠等身観音永代奉額
三	小室	七三七	畠山重忠城跡の図(写) 明治一二年
四	小室	四五七九	畠山重忠等身千手観音永代奉額句集・明治二六年
五	足立	一〇四九	箱王丸・曾我裕信・畠山重忠芝居絵・慶応二年
六	高橋(周)	二八四七	寄付金領収書(畠山重忠君建碑二付) 明治二五年
七	室氏収集	一七九	少年読本第二編『畠山重忠伝』大正八年
八	同	一九二	畠山重忠公(縦帳)
九	同	二〇〇	畠山重忠物語・下村戀著・昭和三二年
一〇	大柴	一五	新編武蔵國風土記(畠山重忠断碑収録)
一一	小室	六四五五	拓本(畠山重忠公断碑記) 明治一二年
一二	古沢	一二五二八	〔建碑祭典〕 明治一八年

畠山重忠・重保伝承の生成 —内閣文庫本『畠山六郎志げ体』から読み解く— (若松)



左(足立家一〇四九) 右(室氏収集一七九)

の新編武蔵風土記稿(文政一三年)、次が五番の役者絵(慶応二年)で、他は明治以降の資料である。

一見、ばらばらのように見えるこれらの資料は、実は一本の糸で結ばれている。それは重忠を後代の民衆が忘れずに、彼の故地では顕彰のため、建碑や重忠を等身大に写したと伝わる千手観音像に額を奉納したのであり、伝記と芝居絵は全国へ発信されたのである。

これらのなかで、伝記は鎌倉幕府の編纂した『吾妻鏡』から記事を拾って編集したものである一方、芝居は、文学的な脚色を加えて、重忠の超人的な武人としての活躍や、人間性をクローズアップし、無実の身に非業の死が待ち受けていたことに対する、追悼の感情が加味された点で共通しており、芝居絵は、今日風に言うと、重忠を

演じきつた役者のプロマイドであつたということが出来よう。

こうした重忠に関する資料の収集は、文書館の課題の一つであるが、埼玉県が誇る全国区の歴史上の人物であるだけに、資料の所在地も埼玉県を超えて、広く目配りする必要がある。その原資料は一朝一夕にして入手できるものではないが、複写資料や翻刻資料によって、補っていくことは可能である。国立公文書館所蔵の『畠山六郎志け体』（註1）は、重忠の二次史料の中でも古く、成立背景を検討する価値を有しているので、重忠の文学や伝説に関心をお持ちの利用者の方々のために、翻刻・公表しておくことは、館にとつて意義がある。



重忠公園（深谷市畠山）の畠山重忠像

この資料については、幸若舞曲研究で高名な徳田和夫氏が既に翻刻を行っている（註2）が、校訂を進めると、筆者には、徳田氏とは異なる読み方のできる部分も少なくなかったため、改めて翻刻を行ったうえで、現代文の梗概を併載し、畠山重忠・重保伝承の生成について検討してみた。翻刻に当たっては、

変体仮名の表記部分の割合が多く、読みにくいので、可能な限り仮名を漢字に置き換え、段落ごとに改行した。また、送り仮名を丸括弧内に補い、歴史的仮名遣いそのまま濁点はこれを付して表記し、原文表記を右付けした。

一 『畠山六郎志け体』翻刻

抑正治二年正月一日の日⁽¹⁾、源頼朝よしなき事⁽²⁾に失せ⁽³⁾給ひし。其濫觴⁽⁴⁾を尋ぬるに、ある時、頼朝の北の御方⁽⁵⁾御物語のついでに、らい朝⁽⁶⁾に仰せけるは、御内⁽⁷⁾に多き弓取に扱も秩父の六郎は、器用⁽⁸⁾の物、かれ日本一のおのことゆるしたるも道理⁽⁹⁾なりと、の給へば、らい朝きこし召（し）、心の内、量り難うや、思しけん。俄に、若宮に参籠⁽¹⁰⁾の由あつて、御台所⁽¹¹⁾の御番⁽¹²⁾をば秩父の六郎一人に仰つけさせ給ふ。重保、承はれ、一人に女中⁽¹³⁾の御番を承る事、不審のいたり是なり。日夜、隙なく伺候す。

さる間、頼朝は夜になれば、主殿の広庇に忍やかに、上がらせ給ひ、白き絹をかつき、爰かしこを見たまへば、女房達御覧して、主殿の上⁽¹⁴⁾に化生⁽¹⁵⁾有（り）と、日暮るれば、さながらに、おち慄のかせ給ひけり。御台⁽¹⁶⁾きこし召（し）、六郎を召され、不思議なり、化生の物有（り）、払へとの御誼⁽¹⁷⁾なり。重保うけ給（ひ）、紫糸の腹巻に八方磨きのはつふり⁽¹⁸⁾着、秩父の家の重寶に、かうひら⁽¹⁹⁾と言ふ太刀持つて、広縁によもすがら、宿直をしてぞ居たりける。さる間、頼朝、八棟造⁽²⁰⁾の庇をひらりと飛び給ふ。重保これを見て、すはや、化生の物有（り）、組み留めばやと、狙らひしに、庇の上の事なれば、さすが手にはたまらず、ましては留めがたしと、四尺二寸のかうひらを、柄なかにおつ取（り）延べ、吹合せ⁽²¹⁾の庇を飛びたまふ所を、踊りあがつて、ちやうと切る。弓手⁽²²⁾の股の際よりも、さつと切てぞ落としける。大事の手にてましますば、たまりもあへず、落（ち）給（ふ）。

重保とつて押さへて、刺し殺さんとしければ、頼朝にておはします。重保、飛び去つて、ふちん(註)してこそ居たりけれ。らい朝御覽じて、いかに重保よ汝があまりさらになし。唯、らい朝が僻事(註)ぞ、人を召せとの給へば、重保承(り)、いかに人々御まいりあれ、君の御誼と申せば、我もくと参りつゝ、君を見付(け)奉(る)。俄に御所中しんとうし、鎌倉うちのありさまは、あらしに落葉の散り重なつて、吹(き)乱れたることくなり。

さる間、頼朝御子の頼家大名小名を召され、汝らつぶさに聴くべし。われ若宮に参籠の由にて、夜々(註)に此所に来たるを人さらに知られざるによつて、女房達ひとへに化生と心へ、おち慄(註)いてありしに、重保番を預るうへ、日夜、隙なく守護せしに、頼朝庇を飛びけるを、化生と心得、切しなり。らい朝むなしくなるとも、重保があまりさらになし。さるによつて、重保に安房の国をとらすぞ。父重忠は在国なり。此むね慥(に)知らすべしと、栄花やつきぬ五十三、あしたの露と消え給ふ。生死無常の世の習、誰かはひとりのがるべき。らい朝むなしくなり給へば、大名小名ないき評定取くなり。頼家の御誼には、かゝるあやまりは、世に例ある事なり、爰に頼朝の御遺言にて候へば、しけ体が僻事有(る)べからず。去ながら、在国せよとの御誼なり。重保御まへを罷り立つ。稲毛の入道進み出(て)、申せば、恐れ多けれど、まさしく君を失ない奉るを、かくてはいかゝ候べき。とにかくに、重保を退治あれと申(す)。重保傳へ聴き、急ぎ御所へ参り、かやうの不覚をいたす事父重忠が聞(く)ならば、かくては如何候べき。君の御意にて候へば、今まで、かくて候ぬ。御いとまを給(り)、御供せんと申(す)。頼家きこし召(し)、其気ゆめくあるべからず。急ぎ自宅へ帰れと、重保を制したまふ。かゝる事の出くるも、さんぬる文治の頃、梶原の源太(註)とあらしひのありし時、重保、龍宮に行つて、九穴の貝を求めしに、折節、龍

女六郎を御覽じて、急ぎ宮中へ招じ入れ、種々の寵愛限なし。一日二日と過ゆけば、七日迄は留まりぬ。玉の台(註)の新枕、行末契ることのはを、互ひに定め給ひける。すでに重保を返すまじきとありしかば、人と争ふ事あれば、九穴の貝を貸したまへ。此争に勝つならば、勝つうは家の面目なり。必ずここに來たりつゝ、則、夫婦たるべしと、とかく偽りたりければ、龍女はまことと覺し召(す)。九穴の貝と申(す)は龍宮の月日也。返事もなくば、此貝の則に聞となりぬべし。さりながら、重保の家の面目たるべくは、父龍王に申つゝ、三日預け申(す)べし。必ず持ちて來たまへと、かたく契約したまひて、九穴の貝を貸したまふ。

さる間、源太は二尺あまりの鮑をさし上げて浮き上がる。九穴よりも息を吹(き)、さながら、光の如くなり。君も諸人もひとへに九穴の貝にてあるべしと、不思議の思ひをなしたまふ。七日と申(す)に重保は九穴の貝を沈金の箱に入(れ)、由比の汀に浮き上がる。君を始奉(り)、あれはいかにとの給へば、若宮の宝前にて此箱を開けば、光明赫奕(註)としたる光が此貝より出てければ、源太が貝は消えにけり。貴賤君主一同にあつと感じて、暫く鎌倉内は静まらず。頼朝御覽じて、しんへう(註)なり。弓取は海山川に達者にて、用にたつべき物なりと、御盃にさし添へ、六郎重保に一千町給ひにけり。梶原源太も普通に超へし水練と、三百町を給はけりぬ。

其時、重保貝を若宮の沖に沈めけり。龍女はしけ体を迎へんと、おぼし召(し)、由比の汀に有しかど、六郎は出ざれば、ちから及ばず、貝を取(り)、龍宮に帰らるる。其後、重保を待(ち)侘びたまひて、かゝるしやうけをなすならば、重保が日本に身の置き所有(る)まじ。さあらん時は、必ず、龍宮に來たるべしと、たくみ給ふ事なれば、次第にせんき(註)つものりつゝ、すでに退治になりにけり。

稲毛、仰(せ)をうけ、惣大将を給はり、されども、東八ヶ国の

諸侍は、かかる事は世の中のためにためしあるべきことなれば、頼朝の御遺言悪しくは仰(せ)置かるまじと、再三申されけれども、諸人のせせう(55)定まるうへ、すでに退治の日になりぬ。重保は大力、かくて、組手(36)をさだめらる。日本国の弓取に大力を選ばれけり。筑紫には菊池の七郎(37)、八百人の力なり、甲斐に竹田の太郎(38)、鎌倉には杵本岡田、岩倉。三浦にては朝比奈。遠江には設楽の三郎。三河に足介の太郎。假ば、丈十丈の鬼なりとも、組まんと思ふ大力八人まで選られけり。此人くが寄合ひて、人界に生れても、いたづらになさる身を、日本の弓取に選び出され候しは、各々家の面目成(り)。是非ともに、重保を組み留めて、名を残さんと、各々勇みをなしにけり。すでに明日と定まりぬ。

爰にひとつの物語有(り)。かの朝比奈が母と申(す)は、木曾殿の御内に葵、巴とて、二人の女武者のありし、巴と申せし女なり。義仲が合戦に打負け、粟津が原にて、失せ給ひし時。巴、一騎に打なされしを、おんたの八郎もろしけ(39)三百五十余人が力と名乗(る)。巴と並べて組んだりしを、もろしけが首捻切て、大津のかたへ引かんとす。秩父の重忠、御覧じて、いかにや巴にてはなきか。まさなく(40)も総角(41)を見するは源家の恥辱なるべし。一千人の力と聞(く)、返せ、組まんと有しかば、重忠と見しよりも、あつばれ敵や。いざ組まんと、朱にゆたる打物をからりと捨て、駆け寄する。重忠も打物捨(て)、いざや組んで珍しき(42)勝負をせんといふまゝに、鎧の袖をひつちがへ、むずと組めば、重忠、弓手の脇に、かいこうて(43)、味方の陣へ帰りつ(衍字か)。其後、巴と最愛(44)し、都へ登り給ひけり。かの巴と申すは、剛の武者とは申せども、其頃十八歳にて、ならびもなき美人たり。

去間、重忠、都よりも帰国の時、三浦へ立寄り給ひ、大助(45)に對面し、都の津と(46)に珍しき玉もなし。是を御慰めにとて、巴を大助にま

いらせらる。介は大きに悦(び)、老後の慰め是なりと、寵愛なめならず(47)。あかし暮して過行しに、程なく若を儲くる。かの若の有り様骨太うして、尋常に全体まれなる風情。朝比奈の三郎(48)是成(り)。その頃十九に罷なる。

其時、母の巴、朝比奈を一問所(49)に近付(け)、ひそかに語けるは、おん身はいまだ知らずや、重体「保の誤記」と組むならば、三浦の面目たるべきか。おん身のためには兄にて有(り)。それをいかにと申(す)に、みづからは木曾殿の討たれさせ給ひし時、御供せんと申せしを、巴は国に下りつつ、ひそかに申届けよとの再三御諒の有しかど、只とにかくに御供を申(す)べしと慕いしを、義長重て仰(せ)けり。汝を国へ帰さねば、心中の願たえなんと、涙を流し給へば、此段、力に及ばずと、御暇を給(ひ)て、大津のかたへ駒をうつ。あとより巴と呼ばわりけり。見れば、秩父の重忠成(り)。よき敵ぞと組みければ、日本一の大力にや。ことごとと生捕られ、其まま、最愛せられしに、かくて汝を懐胎し、二ヶ月と申せし時、かの大助に妾ひにけり。程なく御身を儲ければ、介は我子と思せども、御身の父は重忠成(り)。しかれば、かの重保は御身の兄にてあらずや。兄と組みなば、転倒(60)の過誤もいよく恐れ有(り)。如何せんとぞ語(り)ける。

朝比奈つぶさに是を聞(き)、しほれぬ(53)。かう(54)の眼より涙を流し、よくも仰(せ)候物かな。おなじくは、昨日かくとはのたまわで、諸人と定め先ならば、重保が館へ入(り)、ともに腹を切るべきに、今は甲斐なき事成(り)。されども、兄と組まん事、思ひもよらぬことにて有(り)。此ま、日本に有(る)ならば、余人は此儀を知らずして、人の数には思ふまじ。所詮、日本にあらじと、其ま、三浦を忍び出(で)浦嶋や、大井河、三河にかけし八橋を、心細くも打眺め、星崎(54)もはや夕塩に鳴海瀉(55)。熱田の宮を伏し拜(み)、名残

をとめよ不破の関⁽⁵⁶⁾。憂世いつれ醒ヶ井⁽⁵⁷⁾の水に心の近江路や。まふちなはて、つちはしを三上⁽⁵⁸⁾、犬上⁽⁵⁹⁾、鏡山⁽⁶⁰⁾。瀬田の長橋⁽⁶¹⁾、粟津⁽⁶²⁾のやか⁽⁶³⁾の義長失せ給ひし其旧跡を打眺め、おつてを出て、相坂の開の嵐も吹こして、しのみや原⁽⁶⁴⁾よつの辻、まくすか原を帰りみて、清水八坂、白河や、都に早く着にけり。九重の外⁽⁶⁵⁾を打眺め、末を東寺の作り道⁽⁶⁶⁾。山崎、開戸、あくた河⁽⁶⁷⁾、こや行かたも西の宮、御影⁽⁶⁸⁾の森を、もとへ坂、日影に晒す布引や⁽⁶⁹⁾。道は生田の湊川、須磨より明石へ浦つたひ、尾上⁽⁷⁰⁾、高砂⁽⁷¹⁾、室の戸⁽⁷²⁾を開けて、鞍にこがれ行⁽⁷³⁾。浦く通て、厳島門司、早鞆⁽⁷⁴⁾の綱解いて、九国の地をば弓手に見て、博多の津にぞ着にけり。かくて朝比奈、壹岐、対馬に越へ、それより、高麗國へ渡り、是日域⁽⁷⁵⁾の朝比奈の三郎義秀と申⁽⁷⁶⁾す。物、発心⁽⁷⁷⁾はつの誤記⁽⁷⁸⁾の望み有⁽⁷⁹⁾り。此国に有べきと奏聞す。

御かど叡聞ましまして、是は不思議の事成⁽⁸⁰⁾り。叶ふまじとの宣旨にて、百千萬の官人、四方鉄砲放しつゝ、石を飛ばせ、箭を射る事、雷の花の散⁽⁸¹⁾るごとく、身を隠すべき所なし。朝比奈、大きに怒りをなし、其儀にて有⁽⁸²⁾らば、手並み見せんと言ふまゝに、たけ一丈の大石を中につと指あげて、諸人の中へ投げければ、百人ばかり打砕かれて、微塵のごとくになつたりけり。数万の軍兵ら、此由を見るよりも、前後を方じて逃げさりぬ。内裏に聞こし召⁽⁸³⁾して、十二の門を錠閉ざし、如何せんとの詮議成⁽⁸⁴⁾り。かの内裏と申⁽⁸⁵⁾すは、高さ五丈の築地を、石をたたみ、搗ぎ上げ、漆喰にて固むれば、唯黒鐘【鉄の宛字】のごとく成⁽⁸⁶⁾り。かの築地に並んで、十二の門を建てられたり。柱は石を切たて、扉は黒鐘を延べて打つたりけり。朝比奈、此由見るよりも、物くしやといふまゝに、左右の手を戸ひら【扉】にあて、金剛力士の力を、多ひやと押せば、さながら、雷のごとくに、天地も響きつゝ、くわらめかひて、崩れけり。御門を始⁽⁸⁷⁾め奉り、百官卿相、雲客⁽⁸⁸⁾が鬼神の來ると心得て、肝玉しる

【魂】も身にそわす、心性⁽⁸⁹⁾忘るる有様は、目もあてられぬ次第成⁽⁹⁰⁾り。さる間、朝比奈、内裏の内へ走り入⁽⁹¹⁾り、御門へ参内⁽⁹²⁾し、我日域の物なるが、国の望みさらになし、発心の望み成⁽⁹³⁾り。われ此国に有⁽⁹⁴⁾らば、御門を守護し申⁽⁹⁵⁾すべし。諸侯を急ぎ召⁽⁹⁶⁾し、奏聞⁽⁹⁷⁾し、たりければ、御門、叡感ましまして、諸侯を急ぎ召⁽⁹⁸⁾し、るれば、をのおの安堵の思ひをなし、急ぎ内裏へたち帰り、御門に仕へ奉⁽⁹⁹⁾る、諸卿、詮議しけるは、とにかくに朝比奈、御門を守護し奉り、此国に住むなれば、臣下の数になしたまへと、をのおの奏し申せば、御門叡聞⁽¹⁰⁰⁾ましまして、左大臣と任せられ、扱こいまの世道、朝比奈の宮と号しつゝ、日本にさしむかい、祝われ⁽¹⁰¹⁾けるとぞ聞こえける。去間、巴は朝比奈を失い嘆く事限なし。

かくて、鎌倉には重保を退治とて、在鎌倉の軍兵式十萬騎としるさる。すでに、打立つ⁽¹⁰²⁾所に、第一の組手に定むる朝比奈は見えず、おのおの手を失いたる風情なり。かくてあるべきならねば、数万騎のつわ物ども、重保が館へぞ、寄⁽¹⁰³⁾りたりける。去間、重保は腹切らんとおもひしを、頼朝の御遺言、頼家の御意なれば、いままではくて有しに、討手を給わする事、無念の至りこれなり。その気ならば、ひと合戦し、腹切らんといふまゝに、味方の軍兵七千余騎、ひとつ心に合せて、寄する敵を待⁽¹⁰⁴⁾ち居たり。寄手の軍兵ども、大手、搦手、もみあわせ、鯨波をどつと、上ぐる。海山響いて夥し。鯨波のきう静まれば、重保がつわ物ども、大手の木戸を開いて、切先を並べつゝ、わつと言ふて、切つて出づ。寄手の軍兵も爰にて、名譽の太刀を打⁽¹⁰⁵⁾つ。一の筆⁽¹⁰⁶⁾に就かんと、我もと思ふ物ども、手組⁽¹⁰⁷⁾を定め、切りかかる。重保がつわ物ども、あるひは千騎二千騎、甲の鉢を並べつゝ、鎧の袖をかさいて、霰の如く当たる矢も、角の板戸⁽¹⁰⁸⁾をうつ風情、物の数ともせざりけり。向かう物を幸ひに、命を限⁽¹⁰⁹⁾りに切⁽¹¹⁰⁾りかかる。ふた時ばかり戦へば、敵味方は見も分

かず、手負い死人の伏したるは、千騎ばかりぞ見へにける。され共、城の物どもは、ひとときわ猛くや勇みけん。大手へ向かふつわ物ども、さゝめかやつをさつと引いて、くもるかたけへぞ上りける。重保がつわ物ども、敵に息をつかせじと、大手、搦手一同に、心を合わせ切て出(る)。火花を散らし戦へば、二十萬騎の物ども、さんざんに切(り)たてられて、鎌倉内を引(き)しんぞく。

かかつし時、重保寄手の大将稲毛の入道が嫡子稲毛の三郎重成を目にかけ、駒を打つて、をつかくる。重成、叶はじと、鞭を打つて逃げにけり。既に危うく見へしに、かの龍女、しけ体が乗たる馬のくつはみに取(り)付き、濱の方へ曳りて行(く)。重保、是をば知らで、手綱を引けどかなわず。敵は逃ぐると心得、六郎をおつかくる。重保、無念に思ひ、敵の中へ駆け入るれば、又、馬は味方へ逃げ帰る。味方の軍兵これを見、秩父の命は成るか、かやうに逃げて帰る事、妙見、八幡の御立ちありけると、をのをの心安からず。されども上卿のようしとも、重保はともあれ、われら打死究むれば、なんの子細のあるべきと、目と目ときつと見あわせて、敵の中へ切て入り、思ひ思ひ打死す。あるひは、手負ひ落ゆけば、七千余騎の物ども、六郎一騎になりけり。

去間、重保、心は猛く勇めども、手勢一騎もなかりけり。心に任せぬ馬なれば、由比の汀へ曳いてゆく。重保を打ち取れと、我も我もとおつかくる。重保今は力なく、腹切らんと思へども、龍女のなせるわざなれば、太刀も刀もぬけうせぬ。お手を広げ待(ち)居たり。敵此由みるよりも、仮盤「令の誤写」鬼神と言ふとも、太刀も刀も持たざれば、手取にせよと言ふままに、我先にと駆け寄する。重保、此由見るよりも、近付く物をさみわひに、引寄せてねじ殺し、かひ掴んで、多ひとは投げ、人にて人を打殺す。弓手馬手にて投ぐる事、紅葉の散る如くなり。足を取つて、ひつ裂き、腕を取つて、引き抜き、

由比の濱にて、重保が手にかかつて死する物三百七十余人なり。しやうこも今も末代も、ためしあらじと聞こえけり。今は向かう物もなし。重保は此ま、打破つて、武蔵へ行かんは安かりしを、龍女は重保を龍宮が家迎へんとたくみ給ふわざなれば、汀に居つるをさいわひに、俄かに、雷電震動し、すなわち、長夜の闇となり、車軸の雨の降(り)ければ、敵のやつばらも、肝を消して逃げ帰る。重保あきれはて、あつちへ行かんも見えざれば、駒にまかせて行(く)ほどに、もとより龍女は、かくせん為、くつはみに取つき、龍宮が家引いて入り、夢の醒めたる如くにて、そのまま天は晴れにけり。

かくて、稲毛の入道申けるは、重保は雷電のまぎれに、武蔵へぞ落つらん。急ぎ討手を向くべしと、二十萬騎を引率し、秩父の館へぞ寄(せ)たりける。重忠、此由聞こしめし、屈強【んは川の誤記】のつわ物一萬余騎籠りけり。かの秩父の館と申(す)は、深山に分け入り、四方に大河を構へたり。さる間、鎌倉勢左右なく攻めんずやうもなく、四方の山に陣を取(る)。徒に日教を送る。かくて矢合わせ始まり、日日ややに合戦す。

かの重忠の弟に池上の五郎とて、耳しみの唾有(り)。されども五体は黒鐘【鉄の宛字】の如く、敵矢もさらに身に立たず。さながら鬼神の如くなり。九尺に余る大太刀をわつそくに掛け、敵の陣へ駆け入(れ)ば、面を合わせる物はなし。重忠は池上に心を合わせ、屋敷に上がり、幡を上げて下知すれば、池上様の靡きを見て、つの敵をおつはらふ。数万人の軍兵は、池上一人に、おつたてられて、戦をすべきやうはなし。かくては如何あるべきと、稲毛の入道申(し)けるは、昔たい国にけいろくと言ひし物、幽王の御為に、陳の国へ遣わさる。かの陳の国の臣下にいふきよくといふ物有(り)。耳しみの唾にて、此池上が如くなり。大剛のつわ物なれば、幽王の官軍ども数をつくして討たれけり。けいろく、賢き物にて、味方百万騎

聲を合わせて一同に、陳王は落(ち)給(ひ)ぬと、天地を響かし呼ばわれれば、陳王運や尽き給ふ。いふきよくが耳に入り、扱は落させ給ふや御あとを尋ねんと、そのまま陳を落去りぬ。かかるためしを聞く時は、これも心を合わせつつ、秩父は落(ち)て有けると、諸人一度に言ふならば、池上が聞くべきなり。人々此よし聞くよりも、もつともしかるべしとて、聲を合わせて、重忠は落(ち)けるを知らぬかと、天地も響き呼ばはれば、運のきわまる所かな。池上かこれを聞(き)、鞭を打つて落行(き)ぬ。秩父此由御らんじて、重忠はこれに有(り)と狭間を開けて招けども、帰り見る事もなく、其まま山に引き籠り、元結切て居たりけり。

さる間、寄手の大将下知しけるは、入道が申(す)所、天命爰に有(り)。急ぎ責(め)よといひければ、各々勇をなしつつ、諸陣を寄(せ)て責(め)たりけり。重忠は名譽の打死して、名を後の世に残さんと、一族、家の子、郎黨思ふままに、同心す。秩父の家の郎党に本田、榛沢、柏原、いくた、しなかわ、ふせ、おくつみ、たるみ、あねさき、うの、猪俣、かれらは一騎当千なり。まづひと合戦仕(り)、敵の手並み知らんとて、我先にこそ進みけれ。

榛沢此由見るよりも、静まり給へ、方々。我先ず越して、心み【試みの宛字】を見せ申さんと、言ふままに、榛沢がつわ物どもくつばみを並べて、大手の川をわたし切り、寄手の軍兵これを見て、手取りにせんといふままに、我も我もと駆寄する。榛沢、是を見て、敵は猛勢成(り)。味方はわづか三百余騎。敵の中へ駒を入(れ)、駆け乱し、討つべしと、豫て心をあわせつつ、向いの岸へ駆け上げ、敵に息をつかせずし、二手になつて駆け入れ、蜘蛛手(112)かくなわ(113)十文字(114)さんざんに駆け通れば、猛勢は駆け立てられて、方々へ散つたりけり。されども寄手のその中に、しげやまの十郎、榛沢に渡り合ふ。榛沢、是をみて、太刀打の手始受けて見よといふままに、四尺八寸

の打物を、おつ取(り)延べ、ちやうと打つたりけり。しげ山の十郎真つ向二つに切割られ、朝の露とぞ消へにけり。是を初めとして、三百余騎の物ども、我も我もと首取つて、大勢にておほせ【衍字】東西へ、はつと、おつ散らし、川静々と、うち渡し、味方の陣へ引ゐたりけり。此人々の勢ひは、譬へん方こそなかりけれ。

寄手の軍兵に在鎌倉の諸侍、さすが、秩父、【かの誤写】昨日追情をかけし人成(り)と、八ヶ国(115)の人々は攻めんと思ふ心なし。されども人の多ければ、あるひは諸々の物ども、時の高名せんとて、四方の川を一度に越し、今日を限と攻めたりけり。本田の次郎親経、大手の河原に駒かけ据へ、大番【声の誤記】あげて言ひけるは、いかに人々、唯今進んだるつわ物は、相馬の将門(116)の御内なる、うき嶋の住大輔かけ経に五代の後胤。本田の二郎親経(117)なり。我と思わん人々、いざ組まんと言ふままに、敵の陣へ駆けて入(る)。本田が其日の将是【装束】は花やかにこそ見へにけれ。紅い直垂に、白檀磨き(118)の脛当し、虎皮の行膝、あくちだか(119)にふんごうだり(120)。獅子に牡丹の脇盾し、糸緋緘の鎧を草摺長にさつさつと着、九寸五分の鎧通しを馬手の脇に差いたりけり。一尺八寸の打刀十文字に差すままに、四尺二寸の太刀佩ひて、同じ毛の甲を着、五寸に余る黒月毛、金覆輪の鞍(121)置かせ、曲進退(122)に乗たりける。

本田が郎黨五百余騎、続いて駒を駆け入れ、組んで勝負をするもあり。太刀を打つて死するも有(り)。さんざんに戦いけり。寄手の軍兵にかなさわの三郎、本田の二郎に渡り合ふ。親経是を見て、打物をおつ取延べ、横手切にがんじ(124)と切る。かなさわの三郎が弓手の冠の板(125)よりも、袈裟切りといふ物に、つと切(つ)てぞ落としける。たまへの六郎是をみて、いざや組まんと言ふままに、本田の二郎とむんずと組んで、両馬か間へどうと落つ。本田無双の剛の物。たまへを取つて押さへて首を取らんとしたりしに、此間の駆け合ひに大

河を越す事数知らず。濡れつ乾いつ戦へば、刀を抜かんとせし時、鮫鞘巻の目に詰まり、ゑいやと抜けど、抜けざりける。時刻の移る所を、たまへが郎党居り合いて、本田が鎧の隙間をふた刀指【刺の宛字】(し)ければ、たまへかつばと起き上がり、本田が首を打ち落とす。三十一と申(す)に、手籠めた敵に討たれけり。扱こそ男の差すまじきは鮫鞘巻の刀なり。

去間、重忠、本田、榛沢、あねさき、くんきやうの物ども打死する。腹切らんと思召(し)、弟中の三郎、重忠の次男おきたの二郎、ひとつ所に並み居て、重忠仰(せ)けるは、如何におきた、汝は一まづ落(ち)よ。秩父が家を絶やすべきにはあらず。重忠が腹切りぬれば、咎もなし。急げ急げと仰(せ)けり。おきた承り、此は口惜しき御誼かな。そもそも日本に秩父を知らぬ物あるまじ。しかれば六郎が頼朝誤り申(す)事、秩父の家の面目なり。それを如何にと申(す)に、謀叛にもあらず、忠を致さぬにもあらず。さるによつて、頼朝、六郎に恩賞を給り、忠の物に任せらる。是天下に隠れ有まじ。とにかくに、頼朝空しくなり給へば、秩父を退治せらるる事、時節の梅花春風を借らず。生ずる物の滅する事、珍らしからぬ事にて有(り)。我なくとても、秩父といふ名は末代まで絶えずまじ。秩父、此由聞こし召(し)てうてきならず、さればこそ、汝は不覚の物かな。一緒に死して詮もなし。此たびは残いて、父が菩提を弔へかし。親の思ひに似ぬ子をや、子不念父母と説き給ふ。

力及ばず、同心せん。されども、敵の奴原が餘に近く寄りけるに、いざや一矢射んとて、重忠の其日の装束【将是】は赤地の錦の直垂に、ねずみ色の脛当、桶側胴の腹巻、上紐結つて、ちやうと締め、九寸五分の鎧通し、二尺余りの打刀、十文字に差すまゝに、三尺八寸の敵物造の太刀佩ひて、四十二才たる【差いの宛字】切斑の矢筈高にとつて付(け)、黒漆の半頭着、五人張の真中握り、弦食湿し

て立ち給ふ。弟中野の三郎も滋目結の直垂に小桜緘の鎧着、同じ毛の甲の緒を締め、太刀佩き、矢負ひ、重藤の四人張りの真中握り、素引してこそおはしけれ。おきたの二郎も同じく、鬱金染の直垂に、緋緘の鎧着、同じ毛の五枚甲に鍛形打つて猪首に着、銀銅の腰の物、黄金造の太刀佩いて、大中黒の征矢負ひ、四人張りの真中握り、親子兄弟三人、大手の屋蔵に上かつて、目と目ときつと見合わせたる。此人々の有様は天魔鬼神の大将も、面を向くへき様はなし。さる間、重忠矢狭間広々と引かせ、如何に寄手の大将は、稲毛の入道にておわたるな。近う寄つて物聞給へ。重忠腹を切て後、天下は頓て乱(れ)なん。重忠が遺言、頼家に申(す)べし。人々此由聞くよりも、重忠は二相の人、さも有なんと申(し)ける。稲毛の入道か嫡子三郎重成、一陣に駒駆け致し、かくのたまふは重忠にてましますか。御身の世に有し時こそ、二相をさとり、天下の武略も有(り)つれ。今ははや腹切(り)給へと申(す)。重忠是を聞(き)、憎き奴が事は【言葉の宛字】かな。いかに重成聞給へ。重忠が形見に、ひと矢受けよ、といふまゝに、五人張りに十四束取つて、からうち番い、きりきりと引き絞り、しばし固め、ふつと切る。一陣に進んだる稲毛の三郎重成が胸板にはつしと当り、押付へ、くと抜け、後に控へたる弟稲毛の六郎が腰の板にひつしと立つ。二騎の武者は溜めずして、弓手馬手へ、とうとうと落ちにけり。中野、奥田是を見て、矢頃(り)に回るを幸いに、散々に射たりけり。三人の矢先に掛かつて、五十三人死んだりけり。手負う物は幾許成(り)。大将二人空しくなる。かくては、堪へ難くして、大手の河をさつと越して、向の岸へ引きしんぞく。去程に、稲毛の入道、子供二人は射殺され、無念類なくして、諸陣を下知しけるは、城の内の物共、残(り)なく討たれ、やうやう重忠親子兄弟成(り)。かほど迄責なして、時刻遷すわ、不覚成(り)。城へ入れと言ひければ、我も我もと打寄つて、

堀、鹿垣⁽¹⁵³⁾を切落とす。重忠のつわ物ども、爰を先途と戦かへど、寄手は二十萬記【騎の宛字】成(り)。新⁽¹⁵⁴⁾手を入替へ責(め)ければ、城の内の物ども、或るひは討たれ、痛手負い、残(り)すなく成(り)にけり。されども、おくつみは討たれず、重忠御覽じて、汝は館に火をかけよ。腹切らんと給へば、おくつみ、館に火をかくる。弟中野の三郎、おきたの二郎、其次は一族、家の子郎党三十人居流れたり。⁽¹⁵⁴⁾重忠仰けるは、六郎が行方を聞かず。最期悪しくは、よもあらじ。⁽¹⁵⁵⁾如何におくた、汝が自害やうとからん。⁽¹⁵⁶⁾まづまづ腹を切候へ、介錯せんと仰(せ)けり。おくた此由承(り)、御説はかたじけなけれども、御介錯仕(る)。思ひのままに取(り)置きて、自害をせんと申(し)けり。重忠聞(こし)召(し)、ともかくもとの給ひて、腰の刀ひん抜いて、弓手の脇にがばと立て、馬手へきりりと引(き)まわし、返す刀取直し、心元⁽¹⁵⁷⁾に指立て、袴の着際へ押し下ろし、臍を掴んで引出し、寸々に切つて捨て、如何におくた、介錯せよと。承ると申(し)て、御首を掻き落とす。中野を始(め)、一束【族の宛字】家の子郎党三十余人腹切(つ)て、伏しにけり。おくた走り廻つて、ことごとく介錯し、其後、腹切(つ)て、火焰の中へ飛び入(り)、同じ煙と成(り)にけり。かくて寄手のつわ物、鎌倉に帰つて、重忠の遺言次第の様を申(し)けり。頼家つぶさに聞(こし)召(し)、夢の醒めたる心地して、頼朝はまします。重忠は腹切(り)ぬ。天下は闇の如くにて、程なく滅び給ひけり。重忠の遺言感ぜぬ人はなかりけり。

二 梗概

内容は軍記物語に分類されるが、史実とは異なり、虚構が多い。物語のあらずじを、起承転結による構成法を加味しながら紹介する。

冒頭は頼朝の死によって筆を起こし、事故によって畠山重保が殺

害したとする。これを受けて、稲毛入道重成が登場して、重保追討を將軍頼家に進言するが、その因縁として、梶原景季との貝争いの折に、重保が童宮にあつた九穴の貝の力を借りながら、龍女との約束を破つたため、その恨みによって追われる身となつた話を差し挟む。稲毛入道は、じつは龍女によって討手の大将に任じられたのであつた。この挿話は童宮伝説と貝比べ伝説とが複合している。

稲毛は二十萬騎の総大将となつたが、坂東の諸侍は重保が討たれることをいぶかしがった。しかし、退治の日はやってきて、重保の組手に朝比奈三郎を含む八人の大力が選ばれた。ここに朝比奈三郎の荒唐無稽な挿話が組み込まれている。それは、巴が息子の朝比奈に、今まで出生のことを秘密にしておいたが、汝は巴と重忠の子であり、重保の組手となれば、兄殺しとなるとの告白に始まる。朝比奈はこれを聞いて、涙ながらに、兄を討つことは思いもよらず、このまま日本に留まることはできないと、高麗に渡つて、皇帝に永住を申し出るが、容れられず、宮城の中から激しい攻撃を受けたので、怒り心頭に達し、ついに渾身の力で城を打ち破り、直接皇帝に談判し、ついに左大臣に任じられ、朝比奈宮と呼ばれたという寓話である。

重保追討軍の第一の組手である朝比奈がこのような事情で欠けてしまつたので、みな氣勢を殺がれてしまつた。しかし、数万騎が重保の館に寄せたので、七千騎で重保は迎え撃つた。緒戦で有利であつた重保は稲毛入道の嫡子三郎を見つけ、追い討ちをかけたが、龍女の妨害によって、馬の手綱を取られて、浜の方へ引かれていき、味方の軍勢も総崩れとなつた。この様を妙見と八幡のおはなちであるうかと不安がつたという記述は重要である。秩父氏の守護神が妙見菩薩と後に加えられた八幡大菩薩であることを作者が踏まえているからである。その後、一騎だけになつてしまつた重保は腹を切ろうとしたが、龍女の魔法によって刀が消え失せてしまつた。仕方な

く素手で戦い、敵を三百七十余人も殺し、向かう者がいなくなった。今は武蔵へ落ちることも可能であったのだが、龍女のために、にかに長夜の闇となり、車軸の雨の中を、ついに竜宮へ引かれていつてしまった。

これを稲毛入道は重保が武蔵へ落ちたと考えたので、話は重忠討伐へと大きく転換される。二十万騎の追討軍に対して、重忠は屈強の兵一万余騎で秩父の館へ籠もった。ここに重忠の弟で、耳しいの唾である池上五郎の寓話が挿入されている。池上は鬼神のような活躍で数万人の敵を追い払ったので、稲毛の入道は一計を案じ、たい国の鶏肋の故事にならつて、全軍がいちどきに大声で「秩父は落ちた」と叫べたので、池上の耳にも届いて、これを疑わなかった池上は戦線を離脱してしまったのであった。

天運が味方したとする稲毛大將軍は急いで攻めると下知したので、全軍が寄せて攻めた。重忠は名譽の討死を覚悟し、一族家子郎党がそれに同心し、一騎当千の者が我先に進んだ。まず、榛沢が三百余騎で敵陣に駆け入って、各々が首を取って凱旋したので、寄手の軍兵もさすが秩父と感心して、板東八ヶ国の人々は攻めようという心を持たなかった。しかし、多勢の中には高名を望む者もあり、今日を限りに攻め立てたので、本田近常が今度は名乗りをあげて、五百余騎で駒を敵陣に駆け入れ、組討ちや太刀打ちでさんさんに戦った。本田はかなさわの三郎を倒したが、たまへの六郎の首を取ろうとしたその時に、渡河で濡れてふやけた鮫鞘巻の刀が抜けず、逆にたまへの六郎によつて無念の討死にを遂げた。

話の結脈は重忠と一族の滅亡である。重忠は二男のおくた二郎に、家を絶やさぬために落ちることを命じたが、二郎はこれに従わず、最期を共にする道を選んだ。重忠は最期に、矢頃の敵に一矢報いようと、弟中野三郎、二男おくた二郎とともに櫓に上がり、寄手の大

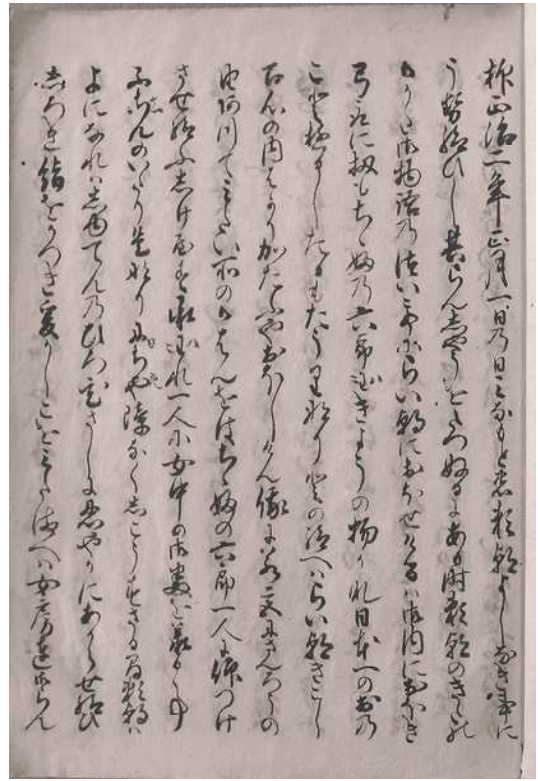
將稲毛入道に向かつて、重忠が腹を切った後、天下は頓に乱れるだろう。この遺言を頼家に伝えるべしと叫んだ。人々は悟りある重忠の言葉はありうることだと口々に語った。そこへ稲毛の嫡子三郎重成が駒駆けし、重忠に切腹を迫ったので、重忠はにくき者の言葉かなど、弓を引き絞って、狙い定めて矢を放ったところ、重成の胸を貫いて、その後ろに控えていた榛谷六郎（実際は四郎が正しい）の腰に当たった。稲毛入道は子供二人を射殺され、無念極まりなかった。また、中野とおくたの弓によつて五十三人が死に、手負いは数え切れなかった。しかし、追討軍の総攻撃によつて館に残る者がわずか三十余人となり、重忠はおくつみに館に火をかけることを命じた。重忠は重保の行方がわからないことが無念であったが、最期が悪いことはよもやあるまいと諦めて、おくたに自害を勧めたが、おくたはこれを断つて介錯を申し出たので、重忠が切腹の後、中野をはじめ一族家子郎党三十余人が腹を切つて倒れた。おくたは介錯に走り回り、最後に火焰の中に飛び込んで同じ煙となった。

寄手のつわものは鎌倉に帰って、重忠の遺言の次第を申述べ、頼家はこれをつぶさに御聴きになり、夢の覚めた心地がして、頼朝公は亡く、重忠が腹を切ってしまったので、天下は闇のようになり、程なく滅んでおしまいになった。重忠の遺言に感じぬ人はなかったと結ぶ。

三 考察

(一) 体裁と来歴

堅帳一九丁の和綴じ本で、表裏の表紙が付き、糸による和綴じがなされている。外題は「こ多希山」で、第一字は者の最も崩した仮名が誤写されたらしい。内題は「畠山六郎志け体」である。内題の「体」は「保」の誤写である。したがって、正しくは外題がはたけ山、



『畠山六郎志け体』冒頭部
(国立公文書館蔵・資料請求番号 204-0125)

内題が畠山六郎しけ保ということになる。

表紙には内閣文庫のラベルが三枚貼付されているが、番号が共通する。配架替のたびに貼り付けられたのである。また、右下隅には「軍記物語」の分類札が貼付されている。扉には「和学講談所」「浅草文庫」「書籍館印」「日本政府図書」の四つの蔵書印が押されている。所蔵組織の変遷を示しており、江戸時代には和学講談所にあったことが確認できる。

本文は漢字交じりの変体仮名で墨書きされているが、平易な言葉でも仮名書きされていることが多い。御家流の整った字体で各頁一行に割り付けられている。行間右側に仮名に相当する漢字を小文字で書き添えたり、誤字を見せけちしている箇所がある。また、外題や内題にさえ誤写があることから、すぐには了解されるように、原本ではなく、写本である。本文中にもあきらかに誤写と思われる箇所がかなり存在している。

また、文字は詰め書きで、章立ての見出しはなく、平出や欠字も

認められない。当然、読点、句点、仮名の濁点もない。

なお、徳田氏によって、神宮文庫にも江戸中期の写本と思われる伝本があり、後補表紙外題は「畠山六郎 全」、元表紙外題は「畠山六郎しけ体 全」であること。本文の差異はほとんどなく、内閣文庫本との先後関係、共通祖本による兄弟関係は今後の課題と報じられている。

(二) 文体・用語・用法

文章の末尾表現は、けりを用いて過去形とする場合と、送り仮名のない漢字で終わっている場合がある。前者は地の文である。後者の例として「ひらり、と飛び給」「ちやうと切」などがあり、主人公の活躍する部分は現在形で記されている。

接続詞については、「さる間」を用いて、事柄を説き起こす用例が目立つ。おなじく「みるよりも」は、みるとすぐにの意味であり、口承文学的な表現である。

音便変化の例も多く、「残いて」・「かいこうて」・「かかつし時」・「ふんごうだり」・「うつつたつ」・「かさいて」・「をつかくる」・「しんぞく」などがあり、一部に中世でも後期以降の用例を含んでいるようである。また、「残いて」などは東国方言の可能性があるという。

軍記物特有の軍装の詳細を究めた表現に、甲冑の形式、緘糸の色、小具足の柄、はつぷり・脛当などの塗り色、行膝やつらぬきの毛皮の種類、太刀の外装、刃渡りの長さ、弓の強度「五人張り」、箆に盛る矢の数「四十二さいたる」などが多く、「くもで、かくなわ、十文字」や馬を「曲進退」に乗る、太刀を「わつそくに掛け」などの常套句と併せて平家物語・源平盛衰記・平治物語・太平記などの軍記物語から引用している可能性がある。

人名の記載方法は、実名又は通称で記し、敬称を付さないのが本書の特徴の一つである。たとえば、「頼朝よしなき事にうせ給ひし」

であり、「らい朝」という音読呼称も混在している。將軍と重忠に対しては、常に敬語表現がなされているだけに、呼び捨ての呼名は不釣合いであり、將軍、秩父殿、畠山庄司二郎などの官職名での呼名が礼儀であった事実からすれば、これは口承文学のための便法であった可能性が考えられよう。幸若舞曲には頼朝をらいちようと読む例が少なくない。たとえば、『含状』には「九つのくびをとりあつめてかまくらへのぼせ、らいてうの御目にかくる」とあり、腰越・堀川夜討・景清にも、らいちようと読む部分が存在している。

(三) 系統と成立年代

第二章で記したように、本書は写本であることが確かであるが、詰め書きで、章立てが行われていない点に、作品としての未完成さが看取される。つまり、読本としては、かなり読みにくいのである。しかし、語り本とみれば、不都合は少なく、「さる間」で話題を転じ、「さる程に」で新しい章に移る『源平盛衰記』との共通用法があることや、「みるよりも」が瞽女の祭文松坂の語りに頻用される例のあること(註1)からも、口承文芸との関係性が類推される。

このほか、文中に「かいこうで」とあるのは、虎明本狂言の『文蔵』に「らうむしや一騎、しら糸のはらまきに、白えの長刀かいこうで」の実例があり、「かかつし時」も同じく虎明本狂言―文蔵に「かかつし時に平家是を聞、さなだ一人うたんとてよきむしや三騎をすぐる」の実例があるので、狂言とも関係性を有している可能性がある。また、「車軸の雨」は幸若―とかしに「たまをみがく鎌倉に、しやぢくの雨をふらし」の用例があつて、幸若舞とも関係をもち、「二相」は浄瑠璃―安宅高館に「二さうをさとつて、あくまのもののおそれんは、たいらのちちふにあやからせ給へ」と、重忠と関連付けた用例があるので、浄瑠璃とも接点がある。徳田和夫氏は『はたけ山』を評して、単なる合戦記ではなく、物語草子の性格を有しているいっぽうで、

舞曲の一曲としてこそ数えられないものだが、口吻は語り物そのものであるとしている。

それでは、成立時期はいつなのか。それは重忠の軍装を「桶側胴の腹巻うわひほ結つて、ちやうとしめ、九寸五ふんの鎧とをし」と記すうち、桶側胴の腹巻は戦国時代を遡ることができない。また、鎧通しも同様である。桶側胴は堅矧鉄板を鋳留めすることによって、おもに鉄砲からの防禦を狙った鎧であり、鉄砲伝来以降に成立した新しい形式なのである。時代考証の失敗は、幸若舞曲『高たち』に、「くろがねを厚さ五分にきたわせたるを、桶がはどうと名づけ」とあるので、おそらく、これを流用したためであつた可能性が高い。また鎧通しを馬手の脇に差してとの表現は、鎌倉時代までは短刀が腰刀と呼称されたことからみて誤りといえよう。同様に、冒頭の頼朝が庇の上に隠れていた御主殿は「八棟造り」と記されているが、これも小田原城下の町屋(外郎屋)に八棟造りのあつたことを『小田原記』が特筆しているように、戦国時代以降のものである。これらのことを根拠として、本作品の成立は上限で戦国時代も一六世紀中葉以降と判断される。

(四) 成立の背景

本作品の前半部は畠山重保の物語であり、源頼朝がよしなき事によつて、この世を去るといふジョッキンクな内容で幕を開ける。頼朝が女装をして屋根の上から窺つたのは、御台所政子の貞操であり、重保を恋敵と錯誤した原因は、直接的には政子の「器用の者、日本一の弓取り」の言葉であつたが、実は重保が日本一の美男として名高かつたという万人承知の前提がある(註3)。同様の構想で綴られたお伽草子に『頼朝の最期』がある。そこでは、『はたけ山』同様に、頼朝の不審な死を六郎に誤つて刺殺されたとし、その後、二代將軍頼家に親の敵とされた六郎が由比ガ浜で御家人たちの謀りにあひ、

詮方なく海に逃げ入り、竜宮の乙姫と契つたと語る。また、「安房の佐久間、扇の酌にて六郎に近く寄りければ、六郎が心得て、取つてつかんで大鳥居のかさぎへ打ち上げたりしかば、(中略)この国にあればこそかやうの身持もせつなれとて、送り文を書きて諸人の方へいとまを乞ひ、我は竜宮へまかるとて、そのまま海へ入て後に四百年になれどもいまだ帰らず。竜宮の乙姫に契りゐたりけり。」と記すように、重保の由比ガ浜合戦における人飛礫の華々しい活躍振りが収められている。大同小異であり、共通祖本が存在していた可能性が高い。

ところで、頼朝の死が重保によつてもたらされ、それが畠山氏滅亡の原因となつたとする構想はどこから出てきたのであろうか。同様の構想は、聖藩本『曾我物語』巻十二「頼朝御遠行の事」にも見出され、その夜当番をしていた重忠が責任を負わされ、追討を受け、やがて滅亡する顛末が記されている。徳竹由明氏は、史実と関係なく頼朝の死が畠山氏の滅亡と結び付けられた理由を、武家政権の創始者として寿祝されるべき存在でありながら、どこか暗い影の付き纏う頼朝と、理想化・超人化されながら、実際には陰謀によりあつてなく滅亡してしまう重忠、そして重忠の滅亡を招いた不孝の貴公子重保は伝承世界では結び付けられやすかつたのではないかと分析する(註4)。

このように、史実には一切触れずに、『はたけ山』と『頼朝の最期』が編まれた理由は何なのか。それは史実を描くことが憚られたからではなかつたのか。すなわち、この作品の原型は、源家が三代で滅亡し、北条氏が実質的な幕府の支配者となつた鎌倉時代中期に誕生したのではなからうか。当然ながら、北条氏が為政者であつた時代には、畠山滅亡の史実は書きようがなかつたのである。

したがって、その時期は、畠山氏滅亡の事実を開示する『吾妻鏡』

の成立以前でなければならぬ。おそらく、藤原定家筆写『兵範記』紙背貼り付け文書のうち、仁治元年(一二四〇)七月十一日付頼舜書状にある「畠山物語御用過候者、…」と同年七月十六日付守康書状にある「畠山更不可急事候、…」から、その存在を知ることのできる『畠山物語』の中には、すでに、畠山父子の滅亡について、このような物語が設えられており、その骨格が『はたけ山』と『頼朝の最期』に踏襲されたのではなからうか。こうした筆者の推測に反して、徳田和夫氏は記載内容が『吾妻鏡』に記された歴史の姿に忠実な奈良絵本『いしもち』こそ、『畠山物語』の流れを汲むもので、畠山父子討死にの物語であつたと推測している。けれども、筆者には、『いしもち』の原型の古さに対するいくつかの疑問がある。その一は「鉢形の城に閉じ籠り」の記述である。鉢形城は戦国時代に北条氏邦の根拠となり、天正十八年に豊臣秀吉の小田原征伐によつて開城した城郭である。文明年間に長尾景春が築城したとされているので、古く見積つても十五世紀の後葉ということになる。その二は四十二才を厄年とする点である。鎌倉時代中期に成立した『拾芥抄』では四十二は厄年とされていない。これらの事実からすれば、『いしもち』の原型は十五世紀後葉を遡らないのではないかと思われる。したがって、『吾妻鏡』とよく整合していたのは、当然の事ということになる(註5)。

これに対し、『畠山六郎志け体』は、原型は古いが、最終的には十六世紀後半から十七世紀前半に完成したお伽草子的な物語であり、道行きの歌物語を含み、かつ表現様式に語り物的な要素も備えている。内容は畠山父子の滅びの物語であるが、時間的定点を示しながら史実を具体的に語るような方法は採らない。また、主人公の重保は竜宮へ、また重忠と巴の間に生れたとする朝比奈義秀は高麗へ姿をくらましたのであつて、死んではない。これは、若くして無念の

死を遂げた二人の鎮魂の意図がそうさせたものであろう。このような異界や異国への往生譚、そして重忠と一族滅亡の場が二俣川ではなく、秩父の館であること、討手が北条氏であることを秘匿した記述方法を用いることは、一見奇想天外で興味本位な創作のように映ずるが、実は、滅びの文学の特質とも評価し得るものであり、十三世紀前半の段階で成立していた『畠山物語』には、既にこのような構想が用意されていた可能性を指摘しておきたい。

最後に、便宜を頂いた国立公文書館へ御礼申し上げます。

註

- (1) 埼玉県立嵐山史跡の博物館の平成二十一年度企画展『畠山重忠とその時代』で国立公文書館から借用した。
- (2) 徳田和夫「内閣文庫蔵『はたけ山』『幸若舞曲研究』第二巻・三弥井書店・一九八一年
- (3) 幸若舞曲『都入』には、日本一の美男重保に上下万民が心浮かれ、重保の「保」の字を書いてお守りにしたことが記されている。
- (4) 徳竹由明「英雄賛嘆『相模川』『頼朝の最期』をめぐって」『お伽草子 百花繚乱』笠間書院・二〇〇九年
- (5) 若松良一「鎌倉御家人畠山重忠の軌跡」『秩父平氏の盛衰』勉誠出版・二〇二二年

作品註

(1) 正治二年正月一日の日 頼朝の命日とするが、吾妻鏡では正治元年正月十三日とする。しかし、改元が四月二十七日なので、正確には建久十年一月十三日である。

(2) よしなき事 たわいもない事・とりとめもない事の意味。古くはよしなきごと

(堤中納言・徒然草)。

- (3) うせる 死ぬ(書記・伊勢物語)
- (4) 濫觴 物事の始まり。起源。起こり。(権記長保二年・太平記)
- (5) 北の御方 きたのおんかた。公卿・大名など身分の高い人の妻を敬つていう語である北の方のさらに尊敬したい方。(太平記・浮世草子・好色一代男)
- (6) らい朝 源頼朝のこと。音読でらいちようと呼んだのは直接諱を呼ばない点で敬意を示したものである。多田満仲をただのまんちゅう、渡辺頼光をらいこうと呼んだのと同根である。しかし尊称を付していないし、官職名で表記しないのが本書の一大特徴である。
- (7) 御内 將軍の旗下に従う武士。直属の家臣。(平家物語「木曾殿の御内に四天王と聞こえる今井・樋口・楯・禰井にくんで死ぬるか」・保元物語「御曹司の御内に、我と思はん兵は出合や」)
- (8) 道理 物事のそうあるべきこと。当然のこと。(続日本紀・宇津保物語)
- (9) 御台所 御台盤所の略。大臣・大将・將軍などの妻を敬つていう語(吾妻鏡治承四年八月二八日条・徳川実記)
- (10) 番 宿直のこと。(宇津保物語・平家物語)
- (11) 女中 宮中・將軍家などに仕官・奉公している女。(園太暦文和四年二月一日条・花宮三代記応永二八年六月七日条)
- (12) さる間 ①そうこうするうちに。(伊勢物語) ②接続詞として、事柄を説き起こす時に用いる。さて。(幸若・腰越・御伽草子・のせ猿草子)
- (13) 化生 ①ばけること。また、そのもの。化生のもの。妖怪。(歌舞伎女人結縁灌頂) ②仏語で化身。(今昔一一・三八) ※化生の者 ばけもの(今鏡)
- (14) 御台 御台所の略。(あさちが露・太平記)
- (15) 誑 貴人の命令。仰せ。御誑。(平家物語の木曾殿最期「御ぢやう、誠に忝なう候」)
- (16) はつふり はつぷり 顔面を防禦する武器。猿頬。(保元物語では半頭と表記)
- (17) かうひら (備前鍛冶高平作の太刀・諸国鍛冶寄)「備前作のかう平の太刀刀帯たるは武蔵国住人、秩父末流畠山庄司重能が一男、次郎重忠(源平盛衰記

三十五)

(18)八棟造 神社または住宅などで、屋根の形が複雑で、棟がいくつもあるもの。北野神社などがその例。(東海道名所図会に北条氏綱が小田原に八棟造の薬店を許したことを記す。)

(19)葺合 ふきあわす。一つの屋根と他の屋根とを葺いて連絡させる。(書記・大鏡)

(20)弓手 弓を持つ方の手。左の手。馬手に対していう。また左側の意味。(今昔物語・平家物語)

(21)ふちん 志が知に誤字される例から、腐心か。心をなやますこと。(史記)

(22)僻事 心得違いのこと。(宇津保物語・平家物語)

(23)しんとう 振動または震動。

(24)内議 内々の相談。内々で評議すること。(江談抄・玉葉・平家物語)

(25)しけ体 体と保は字体が似るので、しけ保の誤写と思われる。内題も同様である。しかし何ヶ所も登場するので、意図的なものかもしれない。

(26)小山田有重のこと。秩父重弘の子有重は小山田別当を称し、保元・平治の乱で源義朝に従い、その後鎌倉御家人となった。その子稲毛重成と榛谷重朝兄弟も御家人として活躍した。有重は重忠にとっては叔父にあたる。

(27)梶原の源太 相模国鎌倉郷を本領とする鎌倉時代初期の武士。頼朝に重用されたが、畠山重忠や結城朝光らに対する讒言によって有力御家人の弾劾を受けて失脚した。正治二年(一一二〇) 謀叛を企て、逃亡中に駿河国で敗死した。

(28)九穴 九竅に同じ。人間・哺乳類の体にある九つの穴。(近松門左衛門作 浄瑠璃当流小栗判官)

(29)たまの台 玉で飾ったような美しい楼台。立派な御殿。(竹取物語・宇津保物語・拾遺・玉葉)

(30)契約 約束すること。(古事談・平家物語・曾我物語)

(31)赫奕 かくやく。かくえき。光り輝くさま。(金刀比羅本平治物語・雑談集)

(32)しんへう 神妙をしんびょうと読む。けなげなこと。感心なこと。立派なこと。

(吾妻鏡・平家物語・宇治拾遺・日葡辞書・椿説弓張月)

(33)しやうけ 障礙・障碍。仏語で、ものごとの発生、持続などにあたつてさまたげになること。転じて、悪魔や怨霊が邪魔をすること。さわり。障害。(今昔物語・色葉字類抄・源平盛衰記一一八・龍神守三権心事)

(34)せんき 戦機か。詮議、疝気(下腹痛)より意味が採りやすい。

(35)そせう 訴訟。うったえること。公事。要求、不平、願などを人に伝えること。

(36)組手 取組む相手。(平治物語・太平記)

(37)菊ちの七郎 肥後の菊池氏で七郎を通称とする人物に武吉がある。兄武重とともに新田義貞軍にくわり、足利尊氏と摂津の湊川で戦った。延元元年五月二六日、楠木正成らの切腹にめぐりあわせ、ともに自害したという。

(38)竹田の太郎 甲斐の武田氏で太郎を通称としたものに信義が有る。大治三年(一一二八) 八月一五日逸見(源) 清光の子として生れる。治承四年、甲斐源氏を率いて挙兵し、富士川の戦いで平氏軍を敗走させ、源頼朝から駿河守護に任じられた。文治二年(一一八六) 三月九日死去。行年五九歳。幼名は竜光丸。

(39)おんたの八郎もろしけ 恩田八郎師重は一条忠頼率いる甲斐源氏軍の将で、豪勇をもつて知られていたが、栗津合戦で巴御前に討たれた。(平家物語)。

(40)まさなく まさなしは正無で、見苦しいまたは予想や期待に合わず、いけないの意。

(41)総角 鎧の背の逆板に打ち付けた環に通してあげまき結びをした飾り紐。総角を見せるは背中を見せるの意。「武蔵の国の住人、私の党の旗頭、熊谷の次郎直実、敵にをひては、良き敵候ぞ。まさなくも、敵に鎧の総角、逆板を見せ給ふものかな。引つ返し御勝負候へ。いかに々」とて(幸若舞曲『敦盛』)

(42)珍しき 賞美に値する。すばらしい。(万葉集・源氏物語) 転じて、あまり例がない。めつたにない。

(43)かいこうて かいこみでの音便か。かいこむは手元に引き寄せて抱えこむ。(虎明本狂言・文蔵「らうむしゃ一騎、しら糸のはらまきに、白えの長刀かいこうて」)

(44)最愛し 非常にかわいく思うこと。たいそう愛すること。(宇津保物語・平家物語「あねの祇王を入道相国さいあひせられければ」「大礪の虎が妹に、きし

ゆと申て、十六歳、宍戸の安芸の四郎殿に最愛せられ申、御所中に有けるが、
〔幸若舞曲『和田酒盛』〕

(45) 大助 三浦大介のこと。一般には三浦義明のことをさすが、次男の義澄も三浦介を継いだ。大治二年(一一二七)生まれ、頼朝の挙兵に初期から加わり、壇ノ浦の合戦や奥州合戦に活躍し、幕府重臣の地位を築いた。相模守護。正治二年一月二三日死去。行年七四歳。

(46) つと 苞。他所に携えていき、また、旅先や出先などから携えて帰り、人に贈るみやげもの。(万葉集・古今集・宇津保物語)

(47) なのみならず 斜ならず。並一通りではない。格別である。(源氏物語・延慶本平家物語)

(48) 朝比奈の三郎 朝比奈義秀のこと。父は和田義盛。安房国朝夷郡を本領とした。

健保元年(一一二二)の和田義盛一族の北条氏襲撃(和田合戦)の際には縦横無尽の活躍をしたが、敗れて船で安房国へ逃れたという。その後の消息は不明で生没年も不詳。水練の技に優れ、勇猛な人物として鬼狂言「朝比奈」の題材とされた。以上のことからすれば、大介の子とする物語の記述は誤り。

(49) 一間所 納戸などに用いられた小部屋のこと。「虎御前の居たりける一間所へ立ち入り、障子を隔てて宣はく、」〔幸若舞曲『和田酒盛』〕「箱王、斜めに喜ふで、一間所へ請じ申、「扱、箱王は、法師になるべく候や。」〔幸若舞曲『元服會我』〕

(50) ことごと 残らず。すつかり。にを伴う場合が多い。(古事記・宇津保物語)

(51) てんとう 転倒。仏語で煩惱のために道理に背いて誤ること。真理に反すること。てんとうと読む。(徒然草)

(52) しおれぬ 悲しみなどのために気を落とす。しよんぼりする。(源氏物語・太平記)

(53) かう 剛。後出箇所判明。

(54) ほしき 星崎(ほしき)。名古屋市南区の地名。永禄三年(一五六〇)今川義元に攻められた佐々木氏が三〇〇騎でこの地を死守して織田信長を迎えた古戦場。

(55) 鳴海潟 愛知県名古屋市区鳴海町の西方にあった海浜の古称。歌枕。江戸時代には近くに東海道五十三次の池鯉鮒(ちりふ)と宮の間にあった鳴海の宿駅があった。(鳴海・二十卷本和名抄)

(56) 不破の関 古代三関の一つ。岐阜県不破郡関ヶ原町松尾、大木戸坂の上に関跡がある。延暦八年(七八九)廃止。歌枕。(万葉集)

(57) 醒ヶ井 滋賀県米原町の地名。雲仙山の北麓にあり、江戸時代は中山道柏原と番場の間にあった宿駅。(仮名草子)

(58) 三上 三上山は滋賀県東部野洲町にある標高四二八メートルの山で、御神社祭神の降臨地。藤原秀郷の百足退治の伝説地。近江富士とも。

(59) 鏡山 地名。滋賀県南部、野洲町と竜王町の境にある標高三八五メートルの山。ふもとに鏡宿があった。歌枕。(古今集・義経記「目には見ぬ小野の摺針、霞に曇る鏡山、伊吹の嶽も近くなる」)

(60) 瀬田の長橋 滋賀県大津市の瀬田川にかかる旧東海道の橋。古来、京都を守る東の要害。瀬田の唐橋とも。(義経記)

(61) 粟津 滋賀県大津市の地名。琵琶湖に臨む松原は粟津が原と呼ばれ、近江八景の一つ「粟津の晴嵐」で知られた。木曾義仲戦死の地。(平家物語・謡曲烏帽子折)の「た」脱か。

(62) やか 「た」脱か。

(63) のみや原 四宮神社は滋賀県大津市四宮町にある天孫神社の旧称。

(64) 九重の外 宮城の外の意

(65) 作り道 新しく作った道路。新道。(梁塵秘抄・平家物語・古今著聞集「人勢おこして、火おほくともしてもとむるに、東寺の南、作り道の田中にてもとめ出してけり」)

(66) あくた河 芥川。大阪府高槻市を流れる淀川の支流。また、その付近の地名。「伊勢物語」の二条の后を誘い出し、鬼にさらわれた話で知られる。歌枕。(伊勢物語)

(67) みかけ 御影。神功皇后が姿をうつして化粧した沢の井があるとところから呼ばれたという兵庫県神戸市東灘区の地名。石屋川東岸の六甲山地南斜面を占め、古くから御影石と呼ばれる花崗岩の産地。

(68) 布引や 道の枕詞。多くの人が引続いて絶え間のないことのたとえ。

(69) 尾上 兵庫県加古川市の加古川河口東岸の地名。尾の上神社があり、松は高砂の松・尾上の松・相生の松として知られた。

(70) 高砂 兵庫県南部の地名。加古川河口の西岸に発達。古来、港町として知られる。謡曲高砂で知られる高砂神社の相生の松や曾根天神松原がある。歌枕。(古今集・古今著聞集)

(71) むろのと 室は室津のこと。兵庫県揖保郡御津町にある地名。漁港があり、奈良時代は播磨五泊の一つに数えられる要港であり、中世には和寇の根拠地となり、江戸時代は瀬戸内海航路の寄港地であった。遊女の発祥地。戸は港の出入り口。

(72) こがれ 焦がれと漕がれの掛詞。

(73) 早瀬 早瀬瀬戸は関門海峡東端の最狭部の水道。下関市壇ノ浦と北九州市門司区和布刈(めかり)との間の海域。急潮で知られる。

(74) 九国 九国。きゆうこくに同じ。九州のこと。(采花物語・玉葉・保元物語)「九国へは、いつか行き着かんずらん」(幸若舞曲『新曲』)

(75) しちいき 日域。日の出る国の意から、日本の異称。曾我物語冒頭に例がある。

「それ、日域秋津島は」金刀比羅本平治物語・説教節―説教刈萱

(76) みるよりも 見るとすぐにの意。誓女の祭文松坂の語りに「見るよりも」・「聞くよりも」を頻用した小林ハルの実例が挙げられている。(鈴木昭英「誓女唄・

祭文松坂の語り」『軍記語りと芸能』軍記文学研究叢書⑩汲古書院 平成二二年一月)

(77) からめかひて 「がらめかす」はがらがらと音を立てるの意。(平治物語)

(78) うんかく 雲客。平安中期以降、清涼殿に昇ることを許された者。四位、五位の貴族及び六位藏人をいう。殿上人。(左経記・平家物語)

(79) しんしを 心性。精神のこと。

(80) 叡聞 天子がお聞きになること。(保元物語)

(81) いわれ 祝われ。大切にされの意。(御伽草子―熊野の本地・仮名草子―仁

勢物語)

(82) うつたつ 打立つの変化した語。出立する。(平家物語・太平記)

(83) 一の筆 軍陣で一番首を取ったことを首帳に最初に記すこと。第一の手柄とされた。(平家物語「其日の高名の一の筆にぞ着きける」・義経記)

(84) 手組 (36)の組ノ手に同じ。

(85) かさいて かざうは物の上、または頭や目の上などにさしかけるの意。かざす。

(86) 角の板戸 門の板戸か。

(87) さいわひに 運よく・好機として(竹取物語)

(88) みも分かす 見も分けず。見分けがつかずの意。

(89) さゝめがやつ 笹目が谷。鎌倉長谷付近の地名。長楽寺があった。

(90) しんぞく 退くの変化した語。(幸若歌謡―司土の上・幸若―敦盛)

(91) かかつし時 かかつし時。動詞かかりに過去の助動詞きの連体形しが付いた「かかりし」の変化した語。こういった・かようなりし・かくありし。中世以後の用法。(虎明本狂言―文蔵「かかつし時に平家是を聞、さなだ一人うたんとてよきむしや三騎をすぐる」同一朝比奈「かかつし所に」)

(92) 稲毛三郎重成 小山田有重の子で三郎を称した。武蔵国稲毛荘を本拠とした。

源頼朝に従い多くの戦功をあげた。元久元年(一一〇五) 畠山重忠が無実の罪によって討たれた責任者として、翌日の六月二三日に殺された。

(93) をつかくる 追い掛ける。おつか・く《他動詞力変下二行活用》(日葡辞書オツカクル)

(94) くつはみ くつばみ。轡。(日本霊異記・太平記)

(95) めい 命。天の定め。天命。命数。(万葉集・十訓抄・太平記)

(96) 妙見 妙見菩薩。北極星を神格化したものといわれ、国土を守護し、災厄を除くという菩薩。秩父氏の守護神が妙見菩薩であることを承知の上でこの物語が書かれていることが重要。(日本霊異記・今昔物語集)

(97) 御はなち 御放ち。見捨てるの意。(源氏物語)

(98) 上卿のようし 建仁三年、源実朝の御台所を京都から迎えるため、上京の供を

命じた平賀朝雅の用事のことか。武藏守と右衛門佐の官位を持っていたされどもから、ようしまでは錯簡と思われる。

- (99) しゃうこ 上古
- (100) たくみ 巧むは計略をめぐらす意。(徒然草)
- (101) 長夜の闇 仏語で煩惱のために迷いの世界にあって、光を見出せないこと。(源氏物語・義経記)
- (102) きもをけす きもを消すは肝を潰すと同義。(平家物語「風のふく日は、けふもや舟にのり給ふらんと肝を消し、いくさといふ時は、ただいまもやうたれ給ふらんと心をつくす」)
- (103) 秩父の館 秩父は畠山氏の先祖の地。重忠の代には男衾郡畠山の館に移っていた。館をたちと読むのは外敵を防ぐために適当な地形などを利用して作った小規模な砦の意味で、用例は、高野本平家物語・徒然草・太平記にある。
- (104) さふなく 左右なく。もちろんのこととしての意。
- (105) 耳しぬ 耳廢・聾。耳の器官の働きを失うこと。(十卷本和名抄)
- (106) わつそく 輪束(わつそく)。長大な太刀を太刀の緒で右肩から左脇にはすかけに背負うこと。(走衆故実・幸若―烏帽子折「ひげきりの御はかせをわつそくにかけ給ひて」四尺八寸有けるが、抜けば玉散る斗成を、白き手綱にて、真中、むずと結ふて、輪束にぞ掛けたりける。)(幸若舞曲『元服曾我』)
- (107) さまのなひき 様の摩き具合。
- (108) けいろく 鶏肋 鶏の肋骨で、たいして役に立たないが、捨てるには惜しいものをいう。(後漢書 揚修伝) 太平記にも用例がある。
- (109) ゆふわう 幽王。紀元前八世紀の中国周第二二代の王(在位前七八二―前七七二)。姓名姫涅(きでつ)。皇后と太子を廢し、寵姫を皇后にし、その子を太子とした。放恣をきわめ、のち、犬戎の力を借りた外戚の申侯に殺された。
- (110) ちん 陳。中国の国名。西周・春秋時代に河南・安徽の一部を占めた小国。四七八年、二四代で楚に滅ぼされた。
- (111) 半さわ 榛沢。榛沢成清のこと。

- (112) くもて 蜘蛛手(くもて)。四方八方に駆け回ること。(浄瑠璃―平仮名盛衰記)
- (113) かくなわ 結果(かくのあわ)という古代菓子。小麦粉を練って緒を結んだ形に作り、油で揚げたもの。転じて、その形の如く太刀などを縦横に振り回して使うさまをいう。(平家物語四巻橋合戦「その後太刀を抜いて戦ふに蜘蛛手・かくなは・十文字」・浄瑠璃傾城反魂香)
- (114) 十もんし 十文字。太刀の使い方の一つ。十の字の形に太刀を使うことか。(平家物語四巻橋合戦) 前後左右に動き回ること。(平治物語「たてさま横さま十文字に、敵をさつとけちらして」)
- (115) 八ヶ国 坂東八ヶ国。関八州。(浄瑠璃―平仮名盛衰記「坂東一の勇者と呼ばれし秩父の重忠」)
- (116) 相馬の将門 相馬小次郎の名乗りから平将門のこと。
- (117) 本田の二郎ちか経 畠山重忠の股肱の臣であった本田次郎近常。覚一本『平家物語』九・落足には、備中守師盛を討つたことを載せる。
- (118) 白檀磨き 金箔置きの上に透漆を塗つたもの。白檀の木を磨き上げた色調に酷似することによる。(松井本太平記「白檀琢の脛当に」虎明本狂言―文蔵「白且みがきのすねあてに、ひおどしの大鎧」)「楊梅桃李の左右の籠手、白檀磨きの脛当て、」(高館)
- (119) あくちたか 開口高。足袋や靴のあぐちを高く引上げて、足首が隠れるようにはくこと。(幸若―高館「熊の皮のみたび、しろかねにてへりかねやうて、あくちたかにふむごうだり」)
- (120) ふんごうだり 踏込んだりの音便変化か。
- (121) いつきにあまる 五寸に余る。馬の丈が四尺五寸余りの意。
- (122) 金覆輪の鞍 黒漆塗りで、金銅の覆輪の付いた鞍。
- (123) 曲進退 きよくしんだい。軽快に前後左右に動くこと。また、その様子。(源平盛衰記「鹿毛なる馬の太く逞しきが、曲進退にして逸物也」)
- (124) がんじ 太刀風鋭く切り払う様を表す語。(幸若―高館「あふひ作三尺八寸よこて切にかむしときる」浄瑠璃―安宅高館「べんけい是を見て、もつてひらい

て、よこて切にがんじときる」

(125) かぶりのいた 鎧の袖、梅檀板、小手の一番上の板。本朝軍器考によれば「袖の上の板を冠の板と古より聞こえし」と紹介している。(幸若―高館・浄瑠璃―吉野都女櫛)

(126) むれつかわいっ 大河を何度も越えたので、「濡れつ乾きつ」したのである。かわいっのいはきの音便。

(127) かつはと かつぱと。激しい勢いで、急に倒れ伏し、または起き上がる様を表す語。がば。(平家物語「かばとおき、舟のへたにたつて」)

(128) くんきやう 「ん」は「つ」の誤記で、屈強。

(129) 時節の梅花春風を借らず 「時節の梅花春風を待たず」は天の命ずるところは、人の力ではいかんともできないの意。「時節の梅花春風を待たず」とも。(咄本―醒睡笑・応仁記)

(130) 残いて 残りてのりが音便変化したものが、いとなるのは例が少なく、方言か。

(131) 子不念父母 しふねんふも。子は父母を尊重しないの意味。仏語か。

(132) 桶側胴 当世具足の胴の様式名。鉄板矧合わせの胴の構造が桶側に似ているところからいう。(幸若―高たち「くろがねを厚さ五分にきたわせたるを、桶がどうと名づけ」桶側胴が記載されていることは本書が戦国期以降の作であることを示している。)

(133) 四十二才たる 四十二指たるで、四十二本差したの意。

(134) はすたか 筈高(はすだか)。胡ろく(やなぐい)に矢を差して負うとき、矢筈が高く現れて見えるようにすること。(太平記「たかうすべ尾の矢三十六指たるを、筈高に負成」)

(135) 五人はり 五人張。四人で弓を曲げ、残る一人がようやく弦をかけるほどの強い弓。(保元物語「五人張の弓、長さ八尺五寸にて」太平記「秀郷は一生涯が間身を放たで持たりける五人張にせき弦懸て嘯ひ湿し」)

(136) くひしめし 食湿(くいしめ)し。口にくわえてぬらす。(太平記「弓押し張り、

弦くひしめして、流鏑(かぶら) 矢を差番ひて立向へば」・浄瑠璃―安宅高館「つるくいしめし、すびきしてこそいたり」弓取直し弦食い湿し、素引してこそ居たりけれ。(幸若舞曲「高館」)

(137) おとと中野の三郎 弟の長野三郎重清のこと。中野は誤り。

(138) ししめゆひ 滋目結・繁目結。一面に染めた目結(鹿子絞り)の総文様。総鹿子の絞り目のあらいもの。(今鏡「しげめゆいの水干きて」平家物語「ここに平山、しげ目ゆひの直垂に緋おどしの鎧きて」平治物語「やがて家貞は重目結の直垂に、洗革の鎧着て、太刀脇はさみ」)

(139) すびき 素引。弓に矢を番えないで、試みに引くこと。(源平盛衰記―衣笠合戦のこと「荒木の弓のいまだ削り治めざるを押張て、すびきたりければ」太平記「張がへの弓の寸引(スビキ)して」)

(140) 五枚甲 五枚兜。鍔を一の板から菱縫の板まで五枚に緘し下げた兜。五枚鍔。(平家物語「つつ井の浄妙明秀はかちんの直垂に黒皮緘の鎧きて、五枚甲の緒をしめ、黒漆の太刀をはき」平治物語「黒糸緘のよろひに、鍔形うたる五枚甲の緒をしめ」虎明本狂言―文蔵「ひおどしの大鎧、おなじけの五まいかぶとにくわがたうつてぞきたりける」)

(141) いくひにき 猪首に着。かぶりものをあおむけて、深くかぶること。(保元物語「黒皮緘の鎧に、同じ毛の五枚冑を猪首に着」)

(142) おほなか黒 大中黒。鷲の矢羽の斑の一種。中黒は上下が白く中が黒い羽。大中黒はその黒い部分の幅が広いものをいう。(平家物語「いか物づくりの大太刀はき、廿四さいたるおほなかぐろの矢おひ」・義経記)

(143) しんしけいてい 親子兄弟を音読みしたもの。しんしに關して(曾我物語「又しんし恩愛のいたつて切なる事」・浄瑠璃―源頼家源実朝鎌倉三代記)

(144) 屋蔵 櫓・矢倉。城壁などの上に作った建物で、諸方を展望して偵察したり、矢や弾丸を発射して防戦の用としたもの。

(145) にそう 二相は仏語で、特徴・形相などの意。自相と共相(くうそう)の二つ。転じて表裏二つの形。外面から内面を悟ること。(幸若―大臣「けういは二そ

うのものなれば、何とおもひてか引つらん」浄瑠璃―安宅高館「二さうをさう
つて、あくまのもののおそれんは、たいらのちちふにあやからせ給へ」畠山重
忠のこと)

さしあて、うつぶさまにふしければ」・幸若―景清)

(146) 重忠にましますか ましますかと最高の敬語表現を用いているのに、重忠と尊
称もなく呼ぶのはおかしい。通常は秩父殿または畠山庄司殿と呼ぶべきであり、
これは作者の独特な扱いである。

(147) 十四束 矢の長さが両手で掴んで十四有ることで、長い矢のことをいう。普通
の矢は十二束。

(148) むな板 胸板。鎧の胸前面の最上部。おにだまり。(保元物語)

(149) をし付 押付。押付板の略。大鎧の背の上部。(金刀比羅本保元物語「八大龍
王の形を(中略)鎧の胸板・をしつけに付けたる間」

(150) やころ 矢比・矢頃(やごろ)。矢を射当てるに程よい距離。(今昔・吾妻鏡・
読本椿説弓張月)

(151) 死んだりけり 死にけり、死ににけりに対して、助動詞の「たり」が付くこと
によって、動作・状態の存続を示す。〜ている・〜しておく。「けり」は過去・
回想の助動詞。したがって、死んでいた。

(152) そこはく 幾許(そこばく)。数量の多いさま、程度の甚だしいこと。多く、沢山。
(伊勢物語・狭衣物語・大鏡・日蓮遺文)

(153) ししかき 猪垣・鹿垣・猪や鹿が田畑に侵入するのを防ぐために石、土、竹や
枝付きの木で編んだ垣。戦場で敵を防ぐのにも用いた。(太平記「城の四方の山々
峰々、二十三箇所陣を取て、鹿垣を二重・三重に結び廻はし、逆木(さかも
ぎ)しげく引懸けて、矢懸り近くぞ攻たりける」)

(154) いななれたり 居流れたり。多くの人が座って列になる。居並ぶ。(屋代本平
家物語・曾我物語「八十余人いななれ、すでに酒宴ぞはじまりける」

(155) よもあらし 世もあらし。意味がない・仕方がないの意。

(156) ようとからん よいだらうの意か。

(157) こころもと 心元。胸元のこと。(平治物語「夫の刀をぬくままに、心もとに